# 新羅・渤海接境地域の交渉実態をめぐって
## ――歴史地理研究における GIS の活用

李　　成　市

# A Study of Negotiations in the Silla-Bohai Contact Zone: Historical Geography Research using GIS

LEE Sungsi

Abstract

The imperative role of fieldwork in East Asian ancient history research has faced considerable challenges over the past three years due to the COVID-19 pandemic, rendering overseas research impractical. In view of this, the question arises as to what extent it is possible to utilize GIS for historical geography research, which is traditionally reliant on fieldwork. This presentation will consider this feasibility in the context of the humanities, illustrated through a case study conducted within the specific research constraints imposed by the pandemic.

The case study in focus aims to unravel the dynamics of contact zone relations between Silla and Bohai from the 8th to the 10th centuries. In the latter half of the 7th century, the kingdom of Silla overthrew Goguryeo and engaged in warfare with Tang China; as it advanced further north into contact zones with the former Goguryeo domain, it established a number of military garrisons, including the “Northern Garrison” (Pukchin). In 886, a northern tribe initiated relations with Silla by affixing a wooden scrap (mokuhen) to a tree inside the garrison, inscribed with a 15-character message of peace (宝露国与黒水国人共向新羅国和通).

It has been deduced that the Poroguk (宝露国) and Hulsuguk nations (黒水国) mentioned in the inscription pertain to two Malgal tribes that lived in the Bohai region bordering Silla. Notably, direct negotiations were avoided. This study seeks to elucidate the specific regions of contact and the characteristics of indirect negotiations employed by these people. In order to better understand the nature of their communication, which took the form of a 15-character wooden document, I intend to utilize GIS to explore the geographical spaces in which such written transmissions occurred, and thereby gain insights into the inner worlds inhabited by the people of that era.

はじめに
一　新羅の北進と接境地域における軍事施設
二　新羅北鎮における黒水靺鞨族との接触
三　GIS の活用による接境地域の地理考証
　(1) 鉄関城の位置と構造
　(2) 北鎮の所在と炭鉱関門の関係
　(3) 炭鉱関門の位置と北鎮の構造
おわりにかえて―接境地域の文字伝達にみる歴史的変化

## はじめに

このたびの第14回東アジア人文学フォーラムは、主題に「ポストコロナ期における東アジア人文学―発展と展望―」を掲げている。コロナ禍によって、私が関わっている古代東アジア史研究の環境もまた大きく制限されてきた。とりわけ今日の古代史研究は木簡、石碑などの一次資料の活用が常態となっており、これに伴って出土地などへのフィールド・ワークを必須としている趨勢にあって、海外調査が全く行えない状況が3年近く続いていてきた。こうした現地調査が中断している中で、GISという補助手段によって、フィールド・ワークを必要とする歴史地理研究の可能性が問われ始めている。本稿は、コロナ渦という特殊な研究環境の中で、GISの活用による事例研究を通して、人文学の可能性を見出そうとする試みである。

まず、対象となる研究内容から述べることにする。私の研究領域である古代東アジア史研究は、国民国家の枠組みを前提としているために、近代の民族や国家の投影は避けがたく、当該期に近代的な民族意識や国境概念が不在であるにも拘わらず、20世紀以降の民族意識や、国境概念を前提にした研究が主流をなしている。私は40年にわたって、そのような歴史研究のあり方を克服すべく従来の研究を批判的に検討してきた(1)。

本稿もまた、そのような研究の一環でもあって、中国東北地方から朝鮮半島にわたる地域に、7世紀末から10世紀初頭の約230年間にわたって境界を接していた新羅と渤海の両国の交渉の実態をめぐる事例をとりあげることにする。

新羅と渤海との両国の関係については、国際的にも学界には大きく二つの考え方がある。一つは、両国間は、ほぼ没交渉であったというものである。公的な記録を見る限り、1145年に高麗王朝で編纂された『三国史記』によれば、800年前後に、新羅から渤海に2度の使節が派遣されたと記すのみだからである。もう一つの考え方は、両国は同一民族の二国家であったがゆえに頻繁な交渉があったと見做し、その記録が伝わらないのは、『三国史記』編纂者がその交流を否定する思想の持ち主であったことによるというものである。

かつて私は、新羅の北方で渤海と接する西北地方に新羅が特殊軍事地域を設置し、北方からの侵入を防遏していた事実を明らかにしたことがある(2)。すなわち、新羅の東北地方における、炭項関門なる軍事施設を設置して防備体制を整えていた事実や、新羅人による境界を隔てた地域住民に対する他者認識のあり方から、頻繁な交渉を想定することは困難であると推定をしてきた。そのような他者認識とは、同時代の中国（唐）側に伝えられた資料には、次のように記されている。

> 新羅の東は長人（巨人）と隔てている。長人は身の丈9メートル、牙のような歯、鎌のような爪をもち、全身が黒い毛で覆われている。彼らは禽獣の肉を火にかけずに生で食べ、あるときは人を捕まえて食べる。人間の女性を捕まえては衣服を繕わせる。その国の境界には山が数十里連なっている。その谷間に鉄の扉があって、長人から守っており、それを「関門」と言っている。新羅は常に石弓隊数千人を駐屯させて守備している。

新羅の東（北）方には、関門を隔てて、人に非ざる異形の集団が存在しているというのである。このたびのフォーラムの主題である「ポストコロナ期における東アジア人文学」という視点から、私の報告を位置づけようとするときに留意したい第一の論点は、新羅という共同体内とその外界に接する境界を媒介に、異形・異人という他者認識を生み出すに至った心理的な機制についてである。

私たちは、コロナ感染症のために移動を厳しく制限される日常を、世界中の人々と共に長期にわたって経験した。そもそも、前近代の人々の感性には、共同体内で共有している価値規範とは異なる他者に対して、非人間のカテゴリーでとらえて排除しようとする性向が強く認められる。こうした、伝統社会に顕著に認められる人間集団の相互間において接触を忌避するという心理的な機制の意味については、パンデミックによって長期にわたり接触を禁じられた経験は、それ以前には自覚しえなかった何ものかを感得し、問題意識を深める契機

(1) 李成市『闘争の場としての古代史―東アジア史のゆくえ』（岩波書店、2018年）。

(2) 李成市「八世紀新羅・渤海関係の一視角―『新唐書』新羅伝長人記事の再検討」（『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、1998年）。

となったのではないだろうか。つまり、我々が当然のように日常的に対面の交渉を行っているときには気づき得ない、人と人とが対面で交渉をすることがもっている意味を、それが突然に途絶した時に、初めて本質的な問いへと向かわせるのではないかということである。ここで取り上げる問題に即して言えば、近隣に居住しながら、人間集団相互があえて長期にわたって制度的に接触を避けることがもっている意味は、パンデミックの体験によって格別に受け止められるのである。

そこで、改めて境界を設けて直接的な交渉を途絶するとは、一体いかなる事態であるのかを、歴史上の問題として分析を試みたいと考えている。つまりは、新羅人は、東北辺境において、境界地帯で如何なる心理的な経験をしたのかを検討してみようとするのが研究の狙いの一つである。

もう一つは、方法論上の問題である。パンデミックの事態にあって、フィールド・ワークを必須として課してきた私は30年近く毎年、海外調査を行ってきたが、その調査が全く行えない状況が3年近く続いてきた。こうした現地調査が不可能な状況にあって、図書館、資料館を以前のように利用できないという事態が続く中で、デジタル資料の活用が大きく注目されてきた。デジタル・ヒューマニティーズという言葉も一般化してきた。そうした研究環境の中で、フィールド・ワークをいささかなりとも補完する方途として、GISの活用に注目される。フィールド・ワークを必要とする歴史地理研究にとって、GISの活用はどこまで有効なのか。本稿は、コロナ渦という特殊な研究環境のなかで、人文学研究の可能性について構想した一つの試みでもある(3)。

## 一　新羅の北進と接境地域における軍事施設

本稿で焦点となる新羅の接境領域については、7世紀後半に、朝鮮半島の東北地方において大きな変動を経て固定化していく。すなわち、新羅は百済・高句麗を滅ぼした後に、さらには唐との戦闘を経て旧高句麗地域との接境地域に進出し、その地域を統合する過程で、築城を繰り返す一方、690年には旧高句麗領域に軍団・牛首辺守幢を配置するなど北辺の備えとしている。そのような新羅の東北辺境において、9世紀末の出来事として、次のような記録が伝えられている。

> 北鎮奏す、「狄国人、鎮に入り、片木を以て樹に掛けて帰る。遂に取り以て献ず」と。其の木、十五字を書して云う、「宝露国と黒水国人、共に新羅国に向きて和通せんとす」と。(『三国史記』巻11、憲康王12年（886）春条)

すなわち、「狄国人」（異域の民）が境界を越えて新羅に交渉を求めて北鎮に侵入し、「宝露国与黒水国人共向新羅国和通」と15文字を記した木片（以後、「木書」とする）を、樹木に掛けて逃げ去ったと、北鎮から新羅の王都に報告されている。ここで新羅側のいう「狄国人」とは、木片に記された「宝露国人、黒水国人」を指し、かれらは渤海国の領域に居住した靺鞨系の種族であるとみなされてきた。

このように木書を介した境界地帯の接触を伝える事件にこそ、9世紀末における新羅と靺鞨系住民との交渉のあり方を解明する手掛かりが秘められていると私は考えている。しかしながら、その性格を追究する際に隘路となるのは、この地域の具体的な歴史的、地理的な状況がまったく把握されないところにある。そこで、改めて事件を報告した北鎮の位置を見定めることにする。

ところで、事件の発端となった「狄国人」がもたらした木書に関する報告は、北鎮から中央に伝達されたという。この報告の起点となった北鎮については、上に掲げた新羅本紀、憲康王12年（886）条以外では、『三国史記』武烈王5年（658）3月条に下記のようにあるのみである。

> 王、何瑟羅地の靺鞨に連なり、人の安んずる能わざるを以て、京を罷め州と為す。都督を置き以て之を鎮む。又た悉直を以て北鎮と為す。

すなわち、何瑟羅地方（現・江陵）は靺鞨族と連なっているので、人心が不安定であるため小京を止めて州とし、都督を置いて鎮護させ、さらには、その北の悉直（現・三陟）を北鎮としたという。この記事を根拠に、9世紀末の北鎮についても、その所在地を、武烈王代のこの記事に求めて、悉直とする見解が韓国の学界の一部では踏襲されている(4)。

---

(3)　本稿におけるGISの活用については、韓相賢氏の多大な助力を得た。深甚なる謝意を表したい。

その一方で、かつて池内宏は、6 世紀以降、新羅末高麗初期までの朝鮮半島東北境の変遷、とりわけ三陟以北、永興以南の地域における新羅の北進あるいは後退について、時系列に即した過程の史料考証を試みている[5]。それらに従えば、北鎮は決して悉直にそのまま留まっていたわけではなく、新羅の当該地域の動向にしたがって移動していた可能性がある。実際に、こうした池内宏の考証を前提に、李丙燾や井上秀雄は、北鎮の所在を朔庭郡（比列忽：現在の安辺）に比定している。私も拙稿において李丙燾説を踏襲したことがある。その後、赤羽目匡由もまた、これに従っている。つまり北鎮は新羅の文武王以降の北進によって、その位置を安辺に移したという認識が共有されつつある[6]。

こうした 9 世紀末の「北鎮」の位置に関わって重視されるのは、文武王 15 年（675）の比列忽州の復置後 7 年に、安北河に沿って「関城」が設けられ「鉄関城」が築造されたとする『三国史記』の記事である（これについては後述する）。

そもそも、新羅の比列忽方面への進出とは、『三国史記』巻 35・地理志に、

> 朔庭郡、本と高句麗の比列忽郡。真興王十七年（556）、梁大平元年、比列州と為し、軍主を置く。孝昭王の時、城を築く、周一千一百八十歩。

とあるように、6 世紀の真興王代における比列忽（安辺）への進出がまずあって、新羅本紀には、この時に比

図 1　六世紀新羅の北進図

(4)　鄭求福他『訳註三国史記』3、註釈篇（上）、韓国精神文化研究院、1997 年、335 頁）は、李基白「高麗太祖時の鎮」（『高麗兵制史研究』一潮閣、1968 年、230 頁）に基づき、憲康王代の北鎮の所在地を三陟とする。

(5)　池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」（『朝鮮総督府古蹟調査特別報告』第 6 冊、1928 年、原載、池内宏『満鮮史研究上世第二冊』吉川弘文館、1960 年、所収）23-72 頁。

(6)　李丙燾『国訳　三国史記』（乙酉文化社、ソウル、1977 年）195 頁。李成市「八世紀新羅・渤海関係の一視角―『新唐書』新羅伝長人記事の再検討」（前掲書）、赤羽目匡由「渤海・新羅接壌地域における黒水・鉄勒・達姑の諸族の存在様態―渤海の辺境支配の一側面」（『渤海王国の政治と社会』吉川弘文館、2011 年）。

列州に沙飡・成宗を軍主として派遣したとある。井上秀雄は、この地理志にみえる孝昭王代（692-702）の築城記事をもって、これを「北鎮」の築造とみなした[7]。

しかしながら、池内宏の仔細な考証に従えば、池内は北鎮と比列州とを同一視してはいない。池内が新羅による比列州の復地に関わって注目するのは、この方面に対する新羅の進出の基点として築かれた前述の「鉄関城」である。池内の指摘は、必ずしも北鎮を特定するための考証ではないが、木書がもたらされた接境地域としての「北鎮」の位置を明らかにするためには、まず池内が注目する「鉄関城」に関する考証の過程を検討する必要がある。

鉄関城については、『三国史記』巻7・新羅本紀には、文武王15年（675）秋9月29日条に、

安北河に縁りて関城を設く、又た鉄関城を築く。

とある。一方、『三国遺事』巻2・文虎王法敏条にも、次のように同様の内容を伝えている。

安北河辺に鉄城を築く。

ここに見える「関城」・「鉄関城」、「鉄城」の位置比定について、池内宏は①『高麗史』地理志・宜州（徳源）条、②『龍飛御天歌』第38章所引注、③『世宗実録』地理志・宜川郡（徳源）条、④『新増東国輿地勝覧』徳原府古跡条など諸史料を精査した上で、徳源邑の北方約6kmの東海岸に沿って文川に赴く街道（安辺会寧街道）の左側に位置する望徳山に注目している。これこそが『世宗実録』地理志に記す鉄関山であり、上記の諸史料が挙げる「鉄関」に比定すべきことを指摘している。さらに、この「鉄関」の名は、高麗恭愍王以前にも遡って蒙古に備える要害の地として『高麗史』に散見され、望徳山の鉄関城が蒙古の侵入を防ぐために築かれていることを確認し、この城が新羅時代から存在したものと認めて、これと『三国史記』新羅本紀に記す同名の鉄関城に比定している[8]。

また、この地域を実見したことのある池内は、徳源の北方に所在する望徳山（標高346m）の地理的な条件に着目し、安辺・文川間の海岸道を扼して天然の要害となっていることから、これが『世宗実録』地理志の鉄関山であり、徳源もまたこの方面の要害の地であることを強調した[9]。

さらに、この望徳山の南の盆地を過ぎて東海に注ぐ北面川の南にも、望徳なる小山（標高191m）があって、鉄関の望徳山と南北で対峙しており、高麗時代の鉄関城址の存在する望徳山と、徳源の北面川の岸辺の望徳山とは、相呼応する要衝であるので、上記の文武王15年条の「安北河に縁りて関城を設く、又た鉄関城を築く」は、二つの望徳山における同時期の築城を意味するものと断言した。さらに「安北河」に比定すべきは、北面川であることを付言し、高麗時代の宜州城は、新羅時代の旧城の改築とみなしている[10]。

以上の考察に基づき、池内宏は、文武王8年秋9月に至り、それまで30年間にわたって高句麗の領域内にあった比列州を復置すると、その7年後の文武王15年（675）に、新羅は比列州（安辺）とそれほど離れていない徳源に防御的設備（鉄関城）を置いたと推定し、その目的は、靺鞨の侵入する通路を扼するためであったと結論づけている[11]。

ところで、北鎮の所在を李丙燾や井上秀雄のように比列忽の地にあるとすると、まずは池内が考証した「鉄関城」「鉄城」と比列忽との両者の関係が問題となる。さらに課題とすべきは、それらの北鎮と鉄関城の北方に位置する井泉郡（徳源）に築かれたとする「炭項関門」との関係である。

すなわち新羅の最北端に築かれたとする井泉郡の炭項関門については、『三国史記』巻35・地理志に、

井泉郡、本と高句麗の泉井郡、文武王二十一年（681）之を取る、景徳王名を改む。炭項関門を築く、今の湧州なり。

---

(7)　井上秀雄訳註『三国史記』（1、平凡社, 東洋文庫、1980年）387頁。

(8)　池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」（前掲書）42頁。

(9)　池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」（前掲書）42-43頁。

(10)　池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」（前掲書）45頁。本稿で明らかにするように、池内の二つの徳望山に鉄関城と関城が築かれていたとする説は成り立たず、正確には、徳望山と巨霊山との間に鉄関城と関城が築かれていたとしなければならない。

(11)　池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」（前掲書）45頁。

と記しており、比列忽（安辺）の北方に位置した井泉郡に「炭項関門」が築かれたとしており、池内が考証した比列忽（安辺）の「関城」「鉄関城」（鉄城）と「炭項関門」との相互関係が改めて問われなければならない。要するに、新羅の東北地方への進出に伴って、この地域の防備に関わった北鎮、鉄関城（関城）、炭項関門の3者の関係が問題となるのである。

かつて、拙稿においては炭項関門の所在を、徳源の鉄関付近に求めようとした18世紀の安鼎福の説に従ったことがある[12]。しかしながら、池内はそれを厳しく批判して、まず井泉郡について地理志が記す炭項関門の築造は、景徳王代ではないことを指摘する。つまりは、地理志の記事は景徳王代には名称を改めたと記すのであって、その後に続く炭項関門の築造とは切り離さなければならず、炭項関門の築造時期は、聖徳王20年（721）において北境に長城を築いたとする新羅本紀を参照することによって、それを新羅と渤海の境界に求めたのである。その位置は、『新唐書』渤海伝が記している新羅と渤海の国境地帯（「南与新羅以泥河爲境」）にあるとし、炭項関門の築設を徳源付近とする安鼎福の所説は疑問であるとした[13]。

この点をさらに追究したのが赤羽目匡由であって、池内の考証を前提に、次のような結論を導き出している。まず、「北鎮」については、李丙燾と同様に比列忽郡とし、この地が9世紀前半から886年の間に、比列忽郡から北鎮に改められたとする。比列忽郡から「北鎮」への改編は、新羅東北境からの後退であり、新羅の東北境防備に対する危急への対応であるとする。また、その前提として新羅の東北境は、唐の高句麗征伐に乗じて669年頃に、新羅は一時的に井泉郡（永興または徳源）まで進出したが、671年頃には比列忽州（現在の安辺）まで後退したと推定している[14]。

その後、文武王15年（675）に、安北河（北面川）の河川に沿って築かれたのが鉄関城であり、それらは関城・鉄関城・鉄城などの異称があるが同一の実体とみなした[15]。

赤羽目の仮説で重要なのは、新羅が675年に鉄関城を築き、さらにその外側にある井泉郡を681年に再び奪取して、その外側に炭項関門を築造したと見做している点である。その時期は、池内宏の所説を踏襲して、聖徳王20年（721）条の「何瑟羅道の丁夫二千を徴し、長城を北境に築く」とある記事の「長城」をもって炭項関門の築造と推定した。

赤羽目によれば、炭項関門は、北方からの侵入を防ぐ最終ラインであり、かつ山峡を利用したものであって、関城・鉄関城（鉄城）の外側に位置していたと推測する。それは新羅最北端の防衛施設とも言うべきものと位置づけられている。赤羽目の仮説を時系列に即して、鉄関城、北鎮、炭項関門の築造の推移は次のとおりである[16]。

① 文武王15年（675）安北河に関城を設けて、鉄関城を築く（新羅本紀）　➡ **鉄関城**
② 孝昭王代（692-702）［比列郡に］城を築く、周一千一百八十歩（地理志）
　比列忽**郡**（安辺）→ **北鎮**へ改編（9世紀前半～886年間）　➡ **北鎮**
③ 聖徳王20年（721）何瑟羅道の丁夫二千を徴し、長城を北境に築く（新羅本紀）
　／井泉郡に炭項関門を築く（地理志）　➡ **炭項関門**

これらの防衛施設の所在する位置を南から見ていくと、北鎮（比列忽）→鉄関城・安北河→井泉郡・炭項関門

⑿ 李成市「八世紀新羅・渤海関係の一視角―『新唐書』新羅伝長人記事の再検討」（前掲書）396頁。
⒀ 池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」（前掲書）46-48頁。池内は、新羅時代の北端の地（井泉郡）を考証して、それを永興に求め、新羅は681年にこの地を占有し、その分水嶺に炭項関門と称する関城を設置したと推定している。池内前掲書（72頁）。
⒁ 赤羽目匡由「渤海・新羅接壌地域における黒水・鉄勒・達姑の諸族の存在様態―渤海の辺境支配の一側面」前掲書）164，5頁。
⒂ 同上、172頁。
⒃ 赤羽目匡由「補説第一　新羅泉井（井泉）郡の位置について」（前掲書）196頁。なお、赤羽目は9世紀前半から886年の間に、比烈（列）郡が軍政下に置かれ北鎮に改められたとする（「渤海・新羅接壌地域における黒水・鉄勒・達姑の諸族の存在様態」（前掲書）165頁。

となる。炭項関門の具体的な位置比定については、南川江支流の分水山脈に注目し、その峠にある泥峴に比定している。

後述するように、赤羽目の以上の仮説については、池内の史料考証を踏まえた分析を根拠とした仮説として尊重されるべきである。しかしながら、その考証は、あくまで文献資料や、かつての情報に依拠する仮説である。そこで、北鎮、鉄関城、炭項関門の三者の機能と位置関係について、現地の報告と GIS を併用し、当該地の地勢に即して改めて検討してみることにしたい。

## 二　新羅北鎮における黒水靺鞨族との接触

前節では、9 世紀末に「狄国人」によって木書がもたらされた北鎮の所在地と、それに関わる鉄関城、炭項関門について、その所在に関する研究史の整理を試みた。あくまで文献上の考証に基づくものではあるが、北鎮にもたらされたとされた木書が至る道程について、ここでは、北鎮、鉄関城、炭項関門などの軍事施設を赤羽目の仮説に従ってシミュレーションすれば、次のようになるであろう。すなわち、黒水国、宝露国を名乗る「狄国人」は、炭項関門（泥峴）を越えて、鉄関城（望徳山）を通過し、北鎮（安辺）に辿り着き、北鎮内の樹木に木書を掛けて去った、ということになる。

もし、そうであるとすると、木書を北鎮にもたらした者たちは、炭項関門（泥峴）から北鎮までを新羅側の干渉なく素通りしたかのようであり、途中の鉄関城は防御上の本来の役割をはたさなかったことになって、この当時すでに新羅の辺防体制が機能しなかった事態を想定しなければならない。つまりは赤羽目が推定する炭項関門から北鎮へのルートは、当時の新羅側の防御体制の機能不全を前提しているように思われるのである。

こうした疑問を抱えているため、赤羽目は、自らの仮説を合理化するために次のような便法を用いている。すなわち、池内の考証に基づき、木書がもたらされた 887 年当時には、「黒水国・宝露国」の「宝露」を黒水靺鞨の一部族（宝露＝勃利）とみなし、彼らは安辺の西 30 里にあった「奉龍駅」付近の瑞谷廃県に存在していたと推測する[17]。つまり黒水靺鞨人は、鉄関城の内側である瑞谷付近に居住しており、新羅の衰頽に伴い境界での緊張が弛緩し、それに乗じて、黒水・鉄勒・達姑の諸族が 8 世紀中葉において境界である泥河（金津川）を越え、炭項関門・鉄関までの新羅領域に侵入したのであって、この領域は公的には新羅領であっても渤海の諸族が侵入できた（入り込んでいた）というのである[18]。注意を要するのは、彼らが当時すでに侵入していた地域とは、赤羽目の作図した**図 2**[19]にあるように、黒水靺鞨の一部である宝露国を名乗った集団の居住地を瑞谷とみなすのであれば、それは鉄関城の南側に位置することになる事実である。そもそも、こうした赤羽目の仮説は、黒末靺鞨人の移住を既成の事実であるかのような他の論者の推定を前提にした推測にすぎず、時代状況を無視した全く従いがたい主張と言わなければならない[20]。

百歩譲って、北鎮が安辺の比列忽に所在したとの前提に立つとしても、新羅の辺防上、重要な軍事拠点である鉄関城から奥深く入り込んだ瑞谷に木書をもたらした「宝露国、黒水国」を名乗る集団が居住していたとす

---

⑰　赤羽目が従った池内の仮説は、以下の出典による。池内宏「麗初の偽鉄利」（『満鮮史研究』中世第一冊、吉川弘文館、1981 年）170 頁。池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」（前掲書）56 頁。

⑱　赤羽目匡由「渤海・新羅接壌地域における黒水・鉄勒・達姑の諸族の存在様態―渤海の辺境支配の一側面」（前掲書）180 頁。なお、池内は『高麗史』兵志の站駅に、文州（今の文川）の嵐山駅と登州（安辺）の朔安駅との間に、瑞谷の寶龍駅がある。この寶龍が寶露に比定され、寶露国は、黒水国と共に安辺地方（朔庭郡）に割拠していた靺鞨の部族を指したものと推定している（池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」前掲書）56 頁。

⑲　赤羽目匡由「補説第一　新羅泉井（井泉）郡の位置について」（前掲書）191 頁。

⑳　そもそも、赤羽目の仮説の最大の根拠は、全面的に三上次男の黒水靺鞨徙民説に従うものである。すなわち、三上は、新羅末高麗初に新羅東北辺に現れる黒水・鉄勒・達姑等の諸族とは、彼らのかつての居住地であった渤海北辺の辺境ではなく、渤海の征服によって渤海東南隅に強制移住させられた集団であって、黒水靺鞨の遷住者たちであるとみなしている。当時の状況から、新羅末に黒水靺鞨が彼らの居住地から自主的に南下することなどはありえないという（三上次男「新羅東北境における黒水・鉄勒・達姑等の諸族について」（『高句麗と渤海』吉川弘文館、1990 年、初出『史学雑誌』50-7、1939 年）。当該論文を見る限り、三上の民族移動の仮説には史料的な根拠は殆どなく、その仮説は、小川裕人「三十部女真に就いて」（『東洋学報』24-4、1937 年）に対する批判のための批判に終始しており、小川の反論として出された三上の所論は全く従うことはできない。ましてや、そのような根拠のない仮説を前提にした上記の赤羽目の仮説は問題になり得ない。

図２　新羅東北辺位置図（赤羽目氏作成地図に基づく）

ると、わずか 10km ほどを隔てた北鎮に赴いて、直接の交渉をせずに北鎮内の樹木に木書をもって通告しなければならなかったことになるが、そのような事態とは、いかなる状況を想定すればよいであろうか。また、そうしてもたらされた木書を北鎮が遠路、王京にまで報告しなければならなかった事由はどこにあるのか。これに応えうる説明がなく、この時の事態の推移が捉えきれていないように思われる。

確かに、9 世紀末に到り新羅人にとって黒水靺鞨は脅威の対象であり、真聖王代には全国に及んだ盗賊の蜂起と共に、真聖王の譲位を決断せざるをえない難題となっていた。すでに指摘があるように『三国史記』新羅本紀にも、その一部が引用されている崔致遠の「譲位表」には、この時の切迫した情勢が雄弁に描写されている。また李基東が指摘したように、次の「譲位表」引用文中の「黒水侵彊、曾噴毒液」の字句は、憲康王 12 年の北鎮からの報告にある「黒水国・宝露国」と符合しているとみてよいであろう[21]。すなわち、当該箇所は下記の通りである。

---

(21)　李基東「新羅下代の王位継承と政治過程」（『新羅骨品制社会と花郎徒』韓国研究院、1980 年）175 頁。

愚臣（真聖王）継守するに及び、諸患併びに臻（いた）り、始めに則ち**黒水彊を侵し、曾て毒液を噴き、**次いで乃ち緑林（群盗）党を成し、競いて狂気を簸（あお）る、所管の九州、仍標の（それらに従う）百郡、皆な寇火に遭い、劫灰（戦火）を見る若し[22]。

しかしながら、これをもって北鎮付近に「黒水徙遷民」が居住していたなどと見なすわけにはいかない。そもそも、古来、アムール川流域にも及ぶ中国東北地方北辺には挹婁と呼ばれる集団が盤踞しており、彼らが海より船舶で周辺地域を寇盗して周辺地域ではこれを大いに憂いていたことが伝わる。時代は遡るが、挹婁と接していた北沃沮もまた、挹婁の寇鈔を畏れ、穴居して守備していたという[23]。

こうした挹婁の活動と関わって興味深いのは、彼らの居住地で産出される貂皮に関わって劉敬叔の説話集『異苑』（巻3、刀子換貂皮）に次のような記事があることである[24]。

貂は句麗に出づ。常に一物の共に穴に居る有り。或ひと之を見るに、形貌は人に類し、長さは三尺なり、能く貂を制し、刀子を愛楽す。其の俗に、人が貂皮を得んとすれば、刀を以て穴口に刺す。此者は夜に穴を出でて、皮を刀辺に置き、人が皮を持ちて去るを待ちて、則ち刀を取る（松田寿男校訂に基づく解釈による）。

すなわち、貂皮をめぐって刀子との交換の際に接触を忌避しておこなわれた場景が描かれている。5世紀における南朝人のデフォルメが加わっており、一見、荒唐無稽の造形された物語のようであるが、注意を要するのは、松田寿男の指摘のとおり、ここに5世紀の挹婁の地域における沈黙交易が窺えることである。直接の接触をさけながら貂皮と刀子を交換する行為の叙述からは、まさに『三国史記』が伝えるように、北鎮に侵入し、かつ人的接触を避けて木書を鎮内の木に括り付けた行為におよぶ要因がみえてくるであろう。つまりは、この地域には、接触を忌避する交易が長きにわたって展開されていたという歴史的な文脈を前提としてとして踏まえなければ、「狄国人」が北鎮に接触を避けて交渉を求めようとする彼らの行動は理解しがたいのである。

## 三　GISの活用による接境地域の地理考証

### （1）鉄関城の位置と構造

以上、北鎮と黒水靺鞨族との接触のあり方を検討し、接境地域である北鎮、鉄関城、炭項関門が所在した地域における黒水靺鞨族の動向を素描し、9世紀末当時の北鎮周辺で生じていた歴史的な背景を確認した。

こうした状況をふまえて、北鎮、鉄関城、炭項関門が設置されていた新羅と渤海の接境地域の歴史地理的な考証をするにあたり、南北分断という現実の政治状況により現地調査が望めない中にあって、まずは現在の地誌ともいうべき『朝鮮郷土大百科』[25]に伝えられた情報に基づくことにする。その上で、GISを利用し、この地域の地勢を検討することによって、北鎮、鉄関城、炭項関門の相互関係を可能な限り推定することに努める

---

(22) 『東文選』に伝わる「譲位表」の全文は下記の通りである。ゴチックは本文における引用箇所である。

臣某言、臣聞欲而不貪、駕説於孔門弟子、徳莫若譲、騰規於晋国行人、苟窃位自安、則妨賢是責晋仮威、臣假威天睠、承之海隅、雖非法令滋彰、未免寇盗充斥、遑恤于後、勇退爲先、敢言善自爲謀、実慮刑茲無赦、臣以当国、雖鬱塁之、蟠桃接境、不尚威臨、且夷斎之、孤竹連彊、本資廉退、矧仮九疇之、余範早襲八条之教、源言必畏天行、皆譲路、蓋稟仁賢之化、得符君子之名、故籩豆饁田鉇矛寄戸、俗雖崇於帯剣、武誠貴於止戈、爰従建国而来、罕致反城之釁。嚮化則南閭、是絶安仁、則東戸何慙。**是以直至臣兄贈大傳臣晸、遠沐皇澤、虔宣詔条、供職一終、安辺万里。而及愚臣継守、諸患併臻、始則黒水侵彊、曾噴毒液、次乃緑林成党、競簸狂気、所管九州、仍標百郡、皆遭寇火、若見劫灰。**加復殺人如麻、曝骨如莽、滄海之横流日甚、昆岡之猛焰風顚、至使仁郷、変爲疵国。（此皆由臣守中迷道、馭下乖方。鴟梟沸響於鳩林、魚鱉労形於鰈水、況乃西帰瑞節、則鷁艦平沈、東降冊書則鳳軺中輟、阻霑膏雨、虚費薫風、是乖誠動於天、実懼罪深於海。群寇既至今爲梗、微臣固無所取材、日辺居義仲之官、非常臣素分、海湖畔守延陵之節、是臣良図、久苦兵戎、仍多疾瘵　深思自適其適、難避各親其親、窃以臣姪男嶢、是臣亡兄晸息、年将志学、器可興宗。山下出泉、蒙能養正、丘仲有李、衆亦思賢、不仮外求、爰従内挙。近已俾権藩寄、用靖国災。然属蟻至壊堤、蝗猶隠蔽境、熟無以濯、溺未能援帑、廩一空、津途四塞、槎不来於八月、路猶於夐於九天、不獲早託梯航、上聞施扆。雖唐虞光被、無憂後至之誅、奈蛮夷寇多、久疎遄征之使、礼実乖闕情莫遑寧。臣毎思量力而行、輒遂奉身而退。自開自落、窃狂花、匪劉匪雕，聊全朽木。所顕恩無虚受、位得実帰。既睽分東顧之憂、空切詠西帰之什。謹原因当国賀正使某官入朝、付表陳譲以聞。

(23) 『三国志』魏書・東夷伝挹婁条、東沃沮条。

(24) 松田寿男「戎塩と人参と貂皮」（『史学雑誌』66-6、1957年原載、『松田寿男著作集』3、東西文化の交流、1987年所収）341頁。

ことにしたい。

まず、前章において検討の対象とした鉄関城については、『朝鮮郷土大百科』の文川市の「遺物遺跡」の項に鉄関城がとりあげられており、下記のように記されている。

鉄関城　国家指定文化財保存級　第 324 号

江原道文川洞にある城址。文川洞の西南、望徳山に位置している。山の峰を中心に方形に近く築城されている。城の周囲は 700m で、城壁は石積である。3 つの雉と城門の痕跡がある。後期新羅と渤海の国境接点地帯と伝えられており、壬辰倭乱時期に、ここで熾烈な激戦があったという[26]。

また、「山と川」の事項においては望徳山については次のようにある。

江原道文川市柯坪洞、関豊洞と元山市竹山里との境界にある山。海抜 347m。

東西 500m ～ 1200m で、南北 3.5km 程度である。北側と東側傾斜面は 35 度～ 60 度と急勾配である。山頂は丸く平らになっている。山頂は東海や文川市を展望するのによいところである[27]。

この望徳山（**写真 1**）の山頂には、周囲 700 メートルの方形の山城（**写真 2**）が築かれており、本稿でも紹介した池内宏の考証や、『朝鮮郷土大百科』の指摘から、この山城が文武王 15 年（675）に築城された鉄関城に他ならないことが確認できる。すでに指摘したとおり、この鉄関城には、関城、鉄城の異称があり、それらは同一実体と見なされてきた。

ただし、『郷土大百科』には、鉄関城の西に位置する「巨霊山を結ぶ山陵線には」「巨霊山城」が位置しており、それは「望徳山の鉄関城の西から始まり、巨霊山の尾根に至る長さ 2.04km の城として城壁は石で築」かれており、「二つの山の間を結ぶ低い丘に城門跡がある」と記述されている。GIS では『郷土大百科』の記述を裏付ける痕跡は確認されないが、それを GIS 上に描くとおおよそ、写真 3 のようになる。

望徳山上の鉄関城から巨霊山に連なる「巨霊山城」については、すでに、朴省炫「6～ 8 世紀東北境界の変遷と構造」（『韓国学論集』77、2019 年）において指摘されており、総督府時代の図版に依拠して、地図上に落とした**図 4** によって参照できる。すなわち、全長 5km 以上におよぶ長城をなしており、長城は鉄関城を起点にして、中間には周囲 2 キロにわたる包谷式山城を始め、大小 5 つの山城を結んでいる（朝鮮総督府国有

写真 1　望徳山（鉄関城）

(25)　朝鮮科学百科事典出版社・韓国平和研究所編『朝鮮郷土大百科』（社団法人平和研究所、2004 年 10 月、ソウル）は、朝鮮民主主義人民共和国・科学百科事典出版社と韓国・平和問題研究所の共同編纂による同国（北朝鮮）の行政・鉱物資源・社会・風土・風俗にわたる全 20 巻の百科全書。同国が、1966 年 5 月に「内閣命令」第 55 号に基づき、朝鮮地方地名辞典編纂委員会を組織し、30 年以上にわたって全国調査を経て 90 年代末に完成し、対外的には 2004 年にソウルで刊行された。

(26)　同上 11 巻、江原道、181 頁。

(27)　同上、177 頁。

写真２　望徳山　山頂の鉄関城（中央の方形をなした箇所）

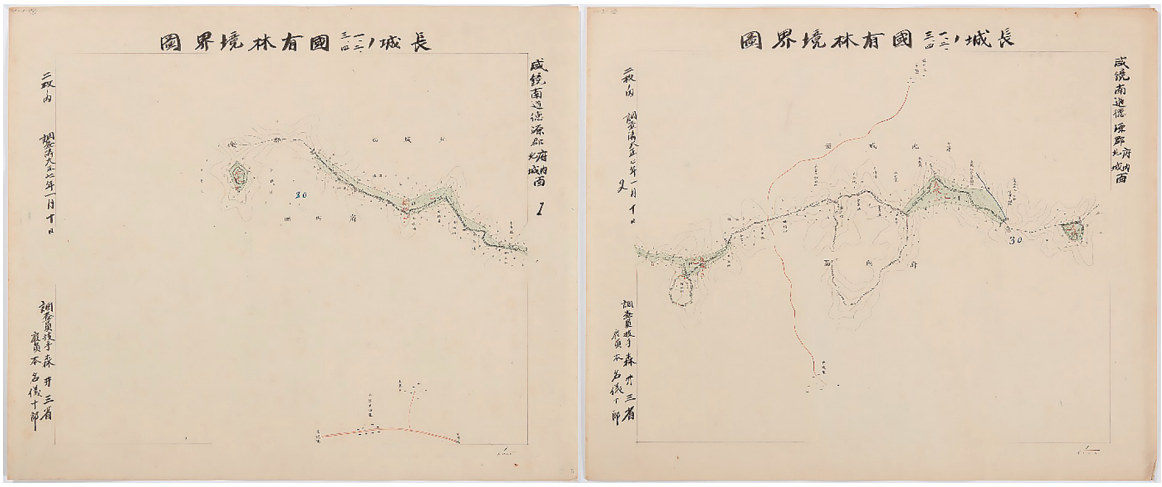


図３　咸鏡南道徳源郡府内面・北城面国有林境界図長城１・２

写真３　巨霊山城（左は巨霊山、右は望徳山）

林境界図)。

それらは、文川郡の北城面と府内面の境界となっており（**図 5**)、古代から近代に至るまで、この地域において、長城（巨霊山城）は大きな機能を担っていたことがわかる。

鉄関城から西方へ長城が連なっていた点で興味深いのは、このように山城と長城からなる関門の構造は、『三国史記』や『三国遺事』に伝わる毛伐郡城（聖徳王 14 年［722］）に酷似しており、やはり山城と長城から交通路を塞ぐように関門が築造されていることが確認されている事実である[28]。毛伐郡城は、日本の賊の路を遮

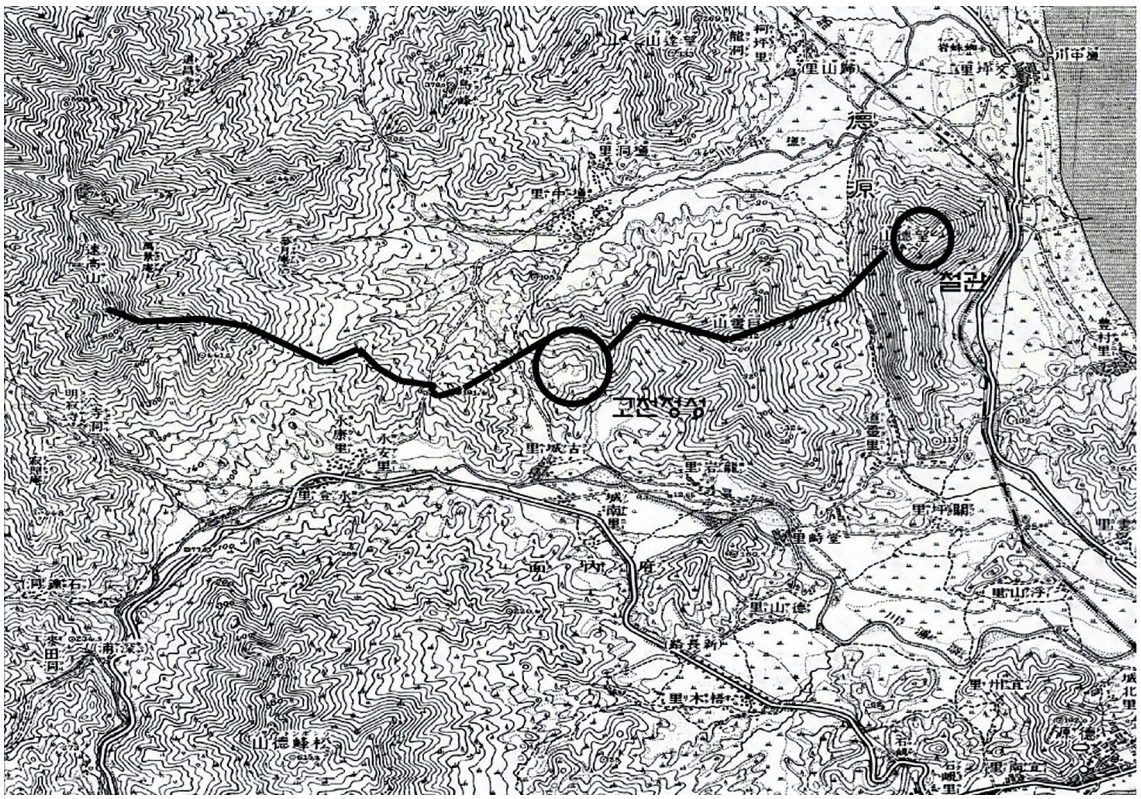

図 4　朴省炫氏「6～ 8 世紀東北境界の変遷と構造」（『韓国学論集』77、2019 年）

図 5　望徳山と巨霊山を結ぶ長城（徳原郡北城面と府内面の境界上に長城が築かれその境界上には山城が築かれている）

る」「日本を防ぐ塞垣」となっており、鉄関城が、山城から連結した長城が北方の敵からの防御のための機能を担っていたとみてよいであろう。

従って、鉄関城もまた、望徳山に所在する山城と巨霊山方面に連なる長城（現在の名は巨霊山城）からなることは、毛伐郡城の築造の目的と構造から類推でき、同一の機能をはたしていたことが理解される。

これらの成果を踏まえれば、これまで『三国史記』の文武王 15 年条に、

安北河に縁りて関城を設く、又た鉄関城を築く。

とある記事は、ただ関城と鉄関城とが同一の実態を指すものとのみ解されてきたが、「関城」が長城を、一方「鉄関城」が望徳山の築造された山城を指しており、両者が一体となって構成された築造物であったと解釈してよいであろう。

ところで、渤海と新羅を隔てる境界で生じた長人伝説（『新唐書』新羅伝）は本稿冒頭で簡略に紹介したが、その末尾に描写された新羅側の防備は次のように記されている。

其の国、山を連ねること数十里、峡あり。固むること鉄闔を以てす。関門と号す。新羅常に弩士数千を屯し之を守る。

ここに見られる「峡あり。固むること鉄闔を以てす。関門と号す」の描写は、まさに望徳山と巨霊山との間の谷を塞いだ長城に符合する。そうすると、『郷土大百科』が伝える「二つの山の間を結ぶ低い丘に城門跡」が「鉄闔」に相当するのであろう。かつて、この記事を 8 世紀の唐側に伝えられた伝聞と考証したことがあるが[29]、鉄関城と関城がこれに符合することは間違いなであろう。何よりも重要なのは、ここが「関門」と認識されていたことである。その構造からも、同時代の名称からも鉄関城は関門の機能を備えていたことが判明した。

### （2）北鎮の所在と炭鉱関門の関係

残された問題は、この鉄関城・関城と北鎮、さらに炭項関門との関係である。その際に留意しなければならないのは、鉄関城には、長城すなわち関門が設けられていたことであり、新羅は北から防御の備えとしていたという事実である。すでに、下記のように築造記事の推移とともに鉄関城、北鎮、炭項関門の築造時期の推移を次のようにみなした。

① 文武王 15 年（675）安北河に関城を設けて、鉄関城を築く（新羅本紀）　➡ **鉄関城**
② 孝昭王代（692-702）［比列郡に］城を築く、周一千一百八十歩（地理志）
　比列忽**郡**（安辺）　→　**北鎮**へ改編（9 世紀前半～ 886 年間）　➡ **北鎮**
③ 聖徳王 20 年（721）何瑟羅道の丁夫二千を徴し、長城を北境に築く（新羅本紀）
　／井泉郡に炭項関門を築く（地理志）　➡ **炭項関門**

この三段階にわたる新羅の北進に伴って、まず、関城（長城）と鉄関城の築造があり、次いで、孝昭王代に築城された比列郡を改編して北鎮とし、さらに炭項関門の築造がなされたとすると、鉄関城以北への進出と、北鎮に相応しい新たな防御施設が要請された歴史的な経緯を問題にしなければならない。さらに北鎮と最終段階で築かれたとする炭項関門の築造が要請された経緯についても、地勢的、構造的な事実をもって明らかにする必要がある。

すでに炭項関門については、その所在を赤羽目説に従って泥峴に比定することを支持したが、『郷土大百科』には、泥峴の言及はなく、炭項関門についても全く言及がない。ただ、文川市の玉坪洞と橋城里の間は二筋の川が流れていて、ここは峠となっており、その東西が小高くなっているので、ここに何がしかの軍事施設の存在が想定される。それを裏付けるように、西側に位置する橋城里については、『朝鮮郷土大百科』には次のような地形の説明がある。

---

(28) 東潮・田中俊明『韓国の古代遺跡　Ⅰ』（新羅編、1988 年、中央公論社）376 頁、
(29) 李成市「八世紀新羅・渤海関係の一視角―『新唐書』新羅伝長人記事の再検討」（前掲書）。

写真 4　伊均城（黄色の線で囲んだ部分は平城）

この地域は西部が高く、玉坪原がある東側に向かって次第に低くなる地勢となっており、領域内の玉女峰（147m）をはじめ海抜 100m ～ 300m の丘陵となっている。河川は南川江が流れている[30]。

つまり、北方（咸興方面）から、鉄関城、安辺に向かうには、この地を通過しなければならず、地形からも城を築くには最適の位置にあるものの、城壁などの記録や関連記事は『郷土大百科』には直接の言及は見られない。

ただし、この地から数百メートル南には、国家指定文化財保存級第 327 号として平城と山城からなる伊均城が紹介されていて注目される。すなわち、

江原道文川市橋城里にある古城址。玉坪洞西側にある玉女峰を中心にして築城されている。玉女峰山麓にしたがい南側平地に続く平山城で、周囲 2km、城壁は土で築かれている。現在、底部の広さ 2m、高さは 5m 程度である。984 年に築造されて文州防御使営を置いたという[31]。

この地を GIS で精査してみると、城壁と推定できる痕跡を辿ってみると、周囲 2km となっており、その記述と符合するので、『郷土大百科』の言う伊均城の城壁とみてよいであろう。

だだし、『郷土大百科』に言及のある 984 年に設置したという「文州防御使」については、『高麗史』巻 58、地理志・東界に、

文州は古に妹城と称す、成宗八年、州防御使と爲し、後に宜州に合わす。

とあり、これが『郷土大百科』の記す伊均城の由来のことと推測されるが、成宗 8 年であれば、989 年となる。また『高麗史』兵志・城堡には成宗 3 年（985）に文州の築城があったとされるので、これが伊均城の築造に関わるのかもしれない。

あえて、ここで注目したいのは、伊均城が周囲 2km の城壁の中に、二つの山を取り囲むように築造された平山城の規模と、伊均城の位置である。伊均城の北に所在する泥峴が炭項関門に比定できるとすれば、南の鉄関城との間に位置している伊均城は、軍事戦略上において重要な位置を占めることになる。というのも、すで

(30)　『朝鮮郷土百科』（前掲）、192 頁。
(31)　同上、181 頁。

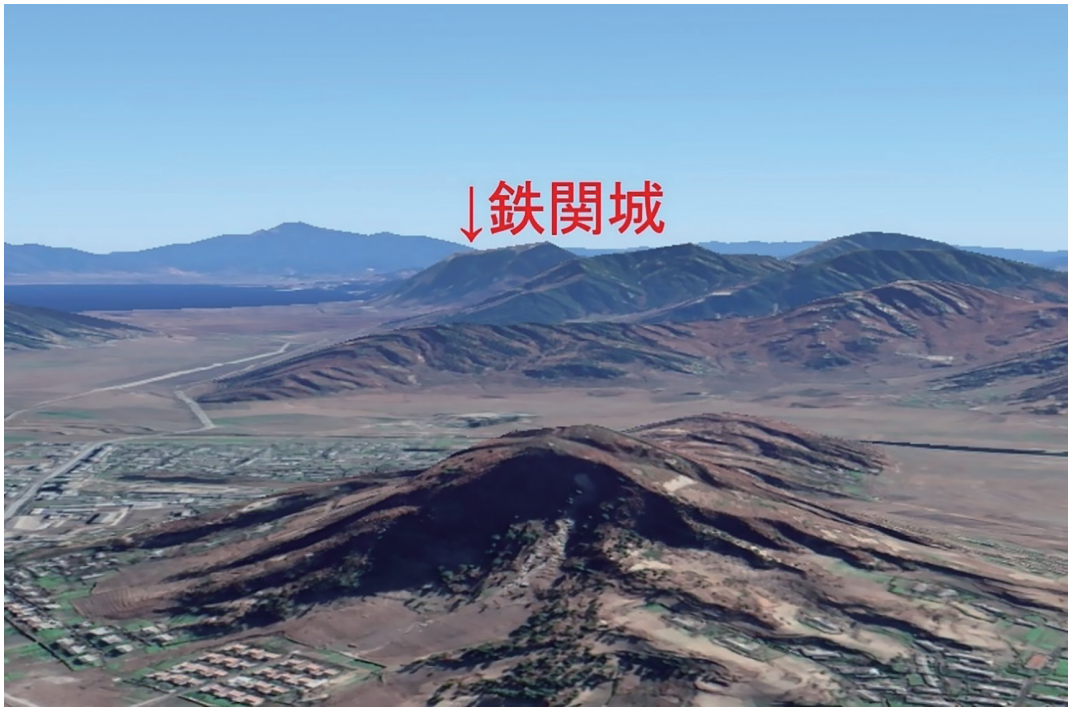


写真５　伊均城から鉄関城方面を望む景観（海は永興湾）

写真６　伊均城と鉄関城の位置関係

に明らかにしたように、鉄関城の関門には、「常に弩士数千」を駐屯させて、この地域を守備していたことが伝えられている[32]。

---

(32)　李成市「八世紀新羅・渤海関係の一視角―『新唐書』新羅伝長人記事の再検討」（前掲書）。

そのような関門の後方には、そこから監視し関門を支援する施設（出城）を必要とするのではあるまいか。また、注意を要するのは、伊均城の立地とその城の構造である。伊均城は標高 100 メートル程度であるが、山城と平城とを複合させた形態の山城である。

要するに、このような伊均山城が、その南方の鉄関城・関城との間に位置していることになる。言い換えれば、南北二つの関門の防御ラインの中間に位置しているのが伊均城となる。そのような位置にあって、伊均城は南（鉄関城）、北（炭項関門）の防御ラインを眺望する位置にあるが、その平城の存在から、軍事上の防御に目的があったというよりは、むしろ周囲 2 キロメートルの平城に重点があったと推定される。つまりは、南北の防御ラインの中間に位置した機関の政庁的な位置を占めていたのではないかと推測される[33]。

それゆえ、従来、比列忽に所在したとされる北鎮の所在地は、再考の余地がある[34]。つまり、北鎮は、鉄関城の後方（北）に位置する伊均城に比定するのが軍事戦略上、また地理的な位置からも合理的であると思われるのである。勿論、これまで文献史料から高麗初期の築造とされた伊均城が新羅時代の旧城の改築であったということになる。この点は、伊均城付近の現地調査をまたなければならない。

### （3）炭鉱関門の位置と北鎮の構造

最後に問題となるのは、北鎮から隔てて築かれたとする炭項関門の位置比定である。すでに赤羽目が文献上の考証から、炭項関門を泥峴に比定したことを述べた。現在、泥峴の地名はなくなったが、注目されるのは、伊均城から北に数キロ行くと、峠があり、それを扼するように峠の東に山城が確認できることである。恐らくは、その地形からこの付近が泥峴とみてよいであろう。とすると、この峠に所在する山城が炭項関門と如何なる関係があるかが問題となる。この山城については、『郷土大百科』によると、江原道川内郡龍潭労働者区には旧城跡があるとされ、「高麗末期に石で築造した末期山城があり、韓美城とも呼ばれている。周りの長さは 1,300m あるが、自然地勢に沿って石が積まれている。城の中には、将台址と井戸跡、瓦片等が散在している」との指摘がある（698 頁）。最も注目すべきは、末期山城の説明の末尾に「鉄関城と互いに対置している」との指摘がある。要するに、この峠を扼する末期山城が、鉄関城と対になっているというのである。

**図 6** に見られるように伊均城がある玉女峰（左下）の西北方に泥峴がみられ、そこにはさらに「石乙古介」「自作古介」と二つの峠が記されている（「古介」は峠（고개）を意味する借音表記）。これら峠の南に位置する泥峴を末期山城に比定すれば、現地の報告にある「鉄関城と互いに対置している」との記述のもつ意味を小さくない。要するに、この峠を扼する末期山城が、「鉄関城と対置している」という位置関係から、ここに炭鉱関門を想定することは十分可能であろう。

しかも、正確な位置は示されていないものの、龍潭労働者区所在の峠（城재）に城址があるとの記述がある（703 頁）。

あくまでも地理的な位置と地勢からの推定ではあるが、改めて憲康王 12 年に木書がもたらされた北鎮を、接触領域の最前線であった北鎮の治所を、鉄関城と泥峴すなわち炭項関門とで南北に遮られていた中間地点に位置する伊均城に比定してみたい。そこは、長く新羅が渤海と対峙する最前線であり、二つの関門（炭項関門と鉄関城と長城）に遮られた空間の要衝に位置している。言い換えれば、北鎮とは、鉄関城・関城と炭項関門との関門に遮られた南北約 16 ㎞の空間の中心に位置して、北辺の要地の軍事拠点をなしていたのではあるまいか。

この推定を前提とすれば、憲康王 12 年（886）に新羅の都にもたらされたという木書は、堅固な鉄関城ではなく、炭項関門を越えて北鎮の治所が所在する伊均城内に持ち込まれたことになる。長らく交通を遮断していた言わば緩衝地帯に位置していた伊均城は、平城と山城から構成されており、その位置や構造からも、そう

---

(33) その際に、新羅が渤海と国境を接していた西北地方の浿江鎮典が参考となる。広域防衛地域の拠点は、大谷郡（現・平山）に所在していた。李成市「新羅兵制における浿江鎮典」（『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、1998 年）。

(34) 赤羽目は、9 世紀前半から 886 年間に比列忽郡は、郡から軍事施設として北鎮への改編を推定しているが、その改編の内容については言及しておらず、ただ、「鎮の設置は、周辺地域を半ば軍政下に置くことを意味する」と指摘する。赤羽目前掲書、165 頁。

図 6　『広輿図』咸鏡道文川郡

写真 7　末期山城（手前）からの関門想定図

した推測が成り立ちうると思われる。

接触が阻まれていた「宝露国」と「黒水国」が新羅との交渉を望む強い意思は、木書を通して新羅の王京に伝達されたにも拘わらず、新羅中央の為政者の政策に反映されることはなかった。木片に記された素朴な内容は、文運隆盛の新羅の翰林貴族たちには野卑で取るに足らないものと見捨てられたのであろう。

というのも、この時に都にもたらされた木書の 15 字と、同時代の都人・崔致遠の流麗な文飾を尽くした「譲位表」とを比べると、その落差はあまりに大きい。その稚拙な文体からなる木片に記された 15 文字が新羅本

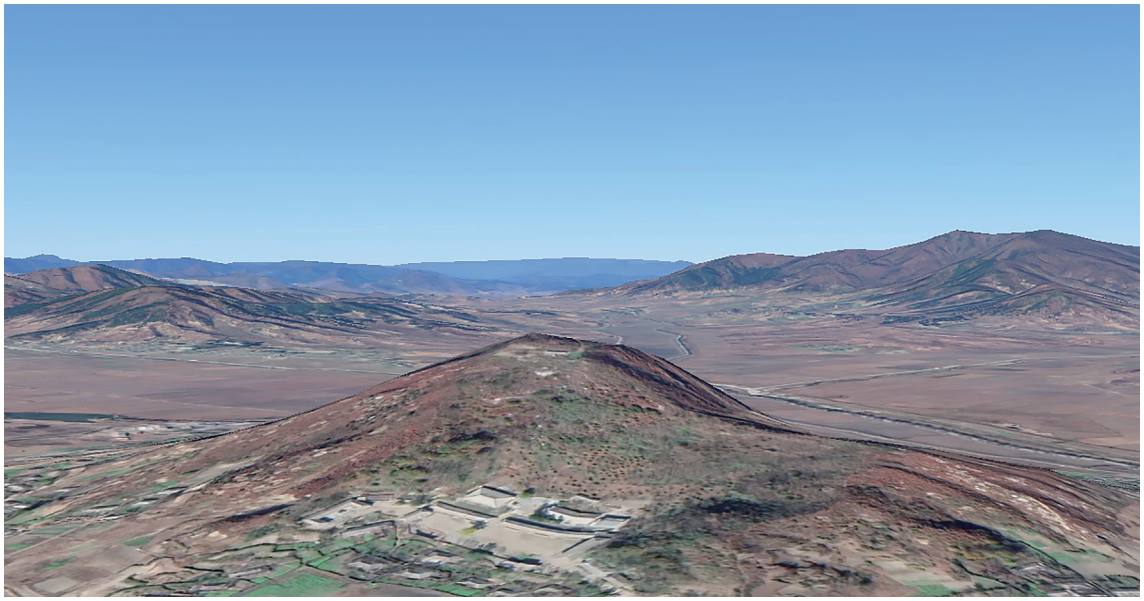

写真 8　伊均城から末期山城（推定　炭項関門）方面を望む

写真 9　末期山城（右手）からの関門想定図

紀にそのまま伝わるのも、その内容もさることながら隔絶した文化的な格差から取るに足らぬ奇なるものと扱われたからではなかろうか。新羅から「狄国人」と呼ばれた黒水靺鞨族たちが木書に籠めたメッセージは、王京の翰林貴族に全く無視されたが、それを受け止められなかった新羅の代償は、あまりに大きいものがあった。その後の後百済や後高句麗の勃興に、なすすべもなく衰退した新羅の崩壊過程をみるにつけ、この木書 15 字は新羅にとって「千丈の堤も螻蟻の穴を以て潰ゆ」に譬えられるのではあるまいか。

## おわりにかえて―接境地域の文字伝達にみる歴史的変化

長く新羅と対立関係にあった渤海は 9 世紀末から 10 世紀初に衰退に向かい、渤海領域内の諸部族の統制がおよばなくなると、それに伴って渤海による唐や日本への交易を組織化する従前の力を全く失うことになる。渤海の支配に服していた靺鞨諸部族が自立的な行動を活発に展開するのは、こうした時期にあたっていた。そのような靺鞨諸部族の新羅東北辺における活動の端緒を物語るのが憲康王 12 年に北鎮にもたらされた木書であった。

本稿は GIS を活用することによって、こうした時代背景をもった両国の接境地域の地理的空間の実相を捉えることをめざしてきた。GIS の活用は、文献史料の考証だけでは知り得ない 3 次元の地理空間から、文献考証の検証が可能であるばかりか、新たな発見につながることを試みてきた。とりわけ新羅北進の最前線であった徳源、文川地域の地理的な空間はこれまでの研究では想像できないレベルで軍事施設の所在を跡付けること

写真 10　炭泥の峴項関門、伊均城（推定北鎮）、鉄関城の位置関係

が可能となった。

ひるがえってみるに、北鎮が所在する新羅東北部のこの地域は、紀元前より、古来、穢族の活動地域であり、その活動は元朔元年（BC128）の蒼海郡設置頃まで遡ると言われる。現在の元山を境界とする江原道と咸鏡道この地域は、百済・高句麗滅亡後の唐との戦闘の過程で、8 世紀前半、聖徳王が咸興以南の地まで進出し、ここに炭項関門を築造すると、この地域は渤海領域と新羅領域とに分断され、南北の交流は二つ王朝の境界管理の下におかれた。こうした接境領域における従前の活動は、新たな事態によって著しく制限されることになった。8 世紀前半期には、この地方へ新羅の防備策が進められた。鉄関城（関門）や炭項関門の設置は、そのような新羅の国境防御策の一環であったと推定される。

新羅側の積極的な接境地域の分断は、接境地域の境界を隔てた人びとに対する非人間的な異形のイメージが新羅人に造成され[35]、そのような接境する異域の住民に対するステレオタイプは、それを共有する集団の社会的凝集（われわれ意識）の契機ともなりうるものである。それは異域に対する恐怖によってもたらされるものでもあった。

憲康王 12 年（886）に北鎮にもたらされた木書 15 字は、この地域の社会的な変化の予兆を語るものであり、渤海国の統制下にあった靺鞨諸部族の活動の一環として考えられる。木書に記された「黒水国」は、高麗太祖

---

(35)　新羅人の東北辺の他者の異形のイメージについては、
李成市「八世紀新羅・渤海関係の一視角―『新唐書』新羅伝長人記事の再検討」（前掲書）、LEE Sungsi “Birth of a Monster Story on the Borderlands: The “Big people” (Chōjin) Legend in 8th-Century Silla” Studies in Japanese Literature and Culture, No2, 2019, p 73-76.
: Center for Collaborative Research on Pre-Modern Texts, National Institute of Japanese Literature (NIJL), National Institutes for the Humanities, ISSN 2434-1606 (Online) を参照。

王建の建国期の軍事活動においても散見される「黒水」「黒水蕃衆」などがあり、さらに顯宗時代に猖獗を極める東海岸を襲う女真族の略奪活動の初期段階におけるものとみられる。

また、新羅側にとって「黒水」については、真聖王 11 年（897）に唐に送られた崔致遠の手になる「譲位表」にも見られるが、そこには 889 年以来の全国的な盗賊蜂起と共に、「黒水」が新羅彊域を侵犯して危害を加えていたことが記される。北鎮からの奏上があって間もなく、新羅の辺境は「黒水」を始めとする靺鞨諸部族の侵犯を被っていたことになる。接境地域の変化は、それ以前からあったことも推察されるが、木書が「狄国人」によって北鎮にもたらされるに際して、直接の接触が忌避されていたことから、その交渉はそれ以前には認めがたい状況を物語るものと捉えることができる。また、彼らは「黒水国」「宝露国」とあえて国号を名乗っていることから、北鎮と彼らとの日常的な接触は考えがたい。彼らとの平和的な交渉が日常化していたならば、接触を避けて木書をもたらすという方法は想定しがたいからである。

9 世紀末以降は、新羅・渤海の並存時代において長く隔てられていた当該地域での相互関係は決して平和的な交渉とは言えない。それは同時代の渤海と日本との交渉とを比較すれば、容易に理解できることである。そうした中で、北鎮へ木書をもたらした靺鞨諸族の働きかけは、古来、朝鮮半島東北海浜部における農耕民と非農耕民（漁労、狩猟民）との交渉が再開された様相を物語るものと見做すことができる。あえて接触を避ける行動は木書に託すという特異な接触の仕方であったがゆえに、幸いにも当時の状況が今日にも伝わったのである。本稿で論じた生業の異なる民族集団相互の内面世界と、それが繰り広げられた地理的空間の検討は、コロナ渦という特殊な環境のもとで、より深められたのではないかと信じている。